

全身性障がいの課程

～移動支援従事者の業務～

目次～

- 1, 移動支援時に必要な援助
- 2, 同行援護とは
- 3, 行動援護とは
- 4, 事故発生の発生を防ごう
- 5, ヒヤリハットで事故を防ごう

移動支援時に必要な援助

移動支援は、障がいのある方と外出し適切に社会参加や余暇活動などを行えるよう支援するサービスです。

- ・ 身体障がい（肢体不自由、聴覚障害、視覚障害、内部障がい等）
- ・ 知的障がい（自閉症、ADHD、LD等）
- ・ 精神障がい（統合失調症、依存症等）

👉 **このような方たちに外出時にはどのような支援が必要かここで考えてみましょう？**

【必要な支援】

同行援護とは？

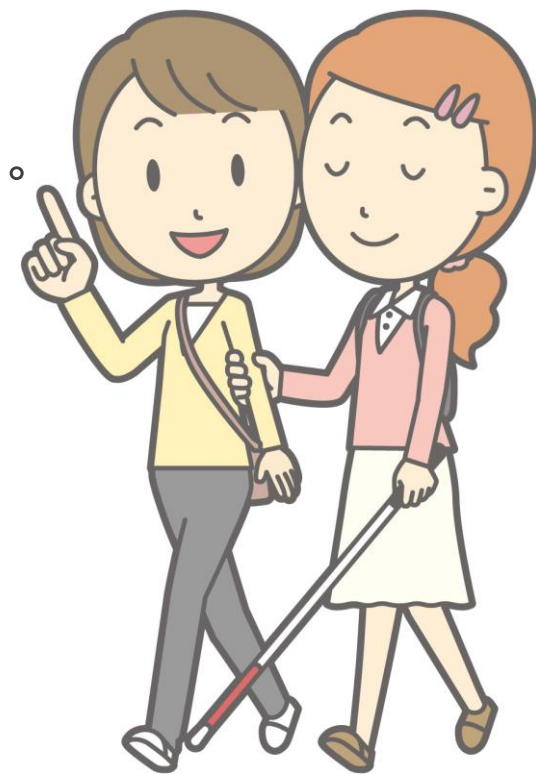
同行援護とは

障害者福祉 移動に著しい困難を有する視覚障害のある方が外出する際、ご本人に**同行**し、移動に必要な情報の提供や、移動の**援護**、排せつ、食事等の介護のほか、ご本人が外出する際に必要な援助を適切かつ効果的に行います。

【同行援護の介助方法とは？】

- ① 聞き手で白杖を持つため白杖を持たない方向の斜め前に立つ。
- ② 手の甲で合図をし腕を持ってもらう。身長差があるときは肩を持ってもらう。
- ③ 利用者様のペースに合わせ歩く。また、必要時には声掛けを行う。
介助者の身体はできるだけ進行方向以外を向かないようにする。
- ④ 方向転換時にはクロックポジションを使い歩く。

👉 それでは実際やってみましょう！！



行動援護とは？

行動に著しい困難を有する知的障害や精神障害のある方が、行動する際に生じ得る危険を回避するために必要な援護、外出時における移動中の介護、排せつ、食事等の介護のほか行動する際に必要な援助を行います。障害の特性を理解した専門のヘルパーがこれらのサービスを行い、知的障害や精神障害のある方の社会参加と地域生活を支援します。

支援内容

行動する際に生じ得る危険を回避するために必要な援護

外出時における移動中の介護

排せつおよび食事等の介護その他の行動する際に必要な援助（具体的には、次のようなサービスを行う）

予防的対応

初めての場所で不安定になり、不適切な行動にでないよう、あらかじめ目的地での行動等を理解していただくなど

制御的対応

行動障害を起こしてしまった時の問題行動を適切におさめるなど

身体介護的対応

便意の認識ができない方の介助 など

事故の発生を防ごう

外出時では、予想できないことが起こります。こちらが注意していても巻き込まれることも予想されます。

また、障害のある方は急な環境変化が苦手なパニックや自傷、他害行為をしてしまうこともあります。

そのようなことをしっかりと理解し、いかなる状況でも対応しなければなりません。

基本、一対一のサービスなので、私たちが事故が起こらないよう利用者様、周りの環境に考慮する必要があります。

どのよなことが原因で事故が起こってしまうのか？

次のページでこのようなことを学んでいこうと思います。



事故発生の大きな2つの原因

【内因性】

- ①認知障害による注意力の低下
- ②視力機能障害による視力低下
- ③感覚障害による感覚の低下、
- ④筋力低下によるADLの低下
- ⑤バランス能力の低下による歩行時のふらつき
- ⑥起立性低血圧により眩暈
- ⑦薬剤性による転倒



【外因性】

- ①床の段差や敷物、電気コード、絨毯などに引っ掛かり転倒
- ②夜間の室内照明が暗くなり転倒。
- ③靴下やズボンの裾を踏むなどにより転倒。



ヒヤリハットで事故を防ごう

【ヒヤリハットとは】

介護の現場で事故になりかねなかった「ヒヤリとした」「ハッとした」経験のことを「ヒヤリハット」と呼んでいます。このようなことを事前に検討しておくことで事故の発生率が激減します。1件の重大事故の背後では、29件の軽傷事故と300件のヒヤリハットが起きている」といわれています。つまり、ヒヤリハットの裏には重大な事故を引き起こす可能性があるということです。

【ヒヤリハット時に検討する4つの内容】

1、発生した現場の環境・体制の検証

車いすの転倒であれば、ブレーキは弛んでいなかったか？座面のクッションがずれていなかったか？などを検証します。

2、介護職員の状態・状況の検証

慣れている業務のため油断していなかったか？忙しさを理由に確認を怠らなかったか？などを検証します。

3、利用者様のADLの検証

介護するにあたり利用者様のADLを理解していたか？当日の健康状態や身体の変化などを振り返り、改めて利用者様の状態を正確に把握します。

4、検証した結果を分析し対応策を具体的に立てる

さまざまな角度から、発生したヒヤリハットの事例を検証。その結果を分析したうえで具体的に対応策を立て、実行します。そのためにも一人ひとりが、ヒヤリハットを積極的に記録する習慣をつけることが大切です。